

# 『アンクル・トムの小屋』と ドメスティック・イデオロギー

福 岡 和 子

(1)

黒人奴隷の解放に多大の貢献をしたとされる『アンクル・トムの小屋』<sup>1</sup> (1851) の評価は、実はこれまで大きく変化してきた。一部の黒人活動家や、当然予測された南部人の感情的な反発は別として、この作品が当時の読者に熱狂的に受け入れられたことは、その売れ行きをみれば明らかである。発売初日で3000部、1年間で30万部といった具合であった。しかしこうした人気も、ちょうど1世紀を経て、ジェイムズ・ボードウィンやリチャード・ライトら黒人奴隷作家の厳しい批判を受けて、急速に冷え込んでしまう。とりわけ黒人と作家という二重の立場から加えられたボードウィンの批判は、一言で言ってしまえば、作品を書いたストウ夫人の誠実さそのものを根底から疑うものであった。なかでも黒人の登場人物に対する批判は手厳しい。ジョージとエライザのミュラート夫婦については、彼らが黒人というのは作者がそう言うだけであって、実際は「どうみても作者の可能な限り白人に」してあり、「トプシとは別の人種」ではないかと言う<sup>2</sup>。一方、肌の色が黒く髪はちぢれ文盲のアンクル・トムは、まぎれもなく黒人ではあるが、いくら辱められても耐えるだけで、「人間性を奪われ、男らしさを失っている」と批判する<sup>3</sup>。このような批判を受けて、「アンクル・トム」という名前は、以後アメリカ黒人の間では、白人に言いなりの自尊心を欠いた臆病者の代名詞になってしまったのである。

さてそれから30年程たった現在、この作品は以上の男性黒人作家たちの断罪から立ち直ろうとしている。わざわざ“男性”と断ったのは、文学史上におけるストウ夫人の復権に貢献したのが、1980年代のフェミニスト批評家であったからである。その代表はジェイン・トムキンズやエリザベス・アモンズである。彼女たちはこの作品を、女性性、とりわけ母性 (motherhood, matriarchy) の力を主張したものであると高く評価する。アモンズは歴史家ルツ・H・ブロックの説を用いて、「理想化されたカテゴリーとしての母性」は農業社会にはなかったイデオロギーであり、産業革命以降のアメリカ社会に発展してきたものだと言う<sup>4</sup>。

This “right kind of mothering” became woman’s supreme calling in Stowe’s America. *To provide children with love and to teach them to internalize the values of hard work, integrity and the avoidance of evil was the sacred, and extremely socially useful, job of Mother.* The dominant culture preached that the very essence of society, its morality, depended upon such mothering.<sup>5</sup> (Italics mine)

女性の役割は家庭を守り子供を立派なキリスト教徒に育てることにあるとする、このドメスティック・イデオロギーは、ストウ夫人の小説においては単に家庭だけに限定されるものではなく、アモンズの言葉で言うなら、家庭の中にありながら「母親であることを通しての社会変革」<sup>6</sup>、またトムキンズによれば、「世界征服」、すなわち「子供達をしかるべく養育することによって人類を改革」<sup>7</sup>することをねらいとするのだという。このような政治的意図は、密接に宗教的なねらいと結びついており、女性と宗教の結びつきをとりわけ強調するアモンズは、「この小説では母性とキリストとは同意語である」<sup>8</sup>、またトムは小説の男性主人公ではなく、「最高の女性主人公」、「母親的黒人のキリスト」<sup>9</sup>とまで読む。

ストウ夫人の小説のみならず、これまで文学史上無視されてきた他の19世紀女性作家たちの復権をもたらしたフェミニスト批評家の功績は認めながらも、わたしはここまでくるといささか疑問をもたざるをえない。はたしてストウ夫人はこの作品のなかで、家庭という場における女性性、母性の力をそこまで理想化し主張しているのだろうか。わたしがそのような疑問を感じだしたのは、実はジョン・D・ヘンドリックの書いたストウ夫人の伝記<sup>10</sup>を読んだときである。そのなかに頻りに引用されるストウ夫人やその夫の手紙を読むとき、今言及したフェミニスト批評家たちがわれわれに提示してくれる作家像とのギャップがどうしても気がかりになったのである。そこで次章では、ストウ夫人の伝記を手掛かりにしたとき、そこからどのような女性像が浮かびあがってくるかをまず見てみたい。

## (2)

1846年ストウ夫人は「水療法」(hydropathy)に出かけた。ヨーロッパから導入されたこの治療法は、平均1週間に7ドル50セントを支払って水浴し水を飲むというものであった。彼女が子供たちを友人や親戚に預け、夫を残し、わざわざヴァーモント州にまで行って水治療を受けたのは、精神、肉体ともに疲れきり、「頭痛、神経痛、両手の不自由、倦怠感、精神的混乱」<sup>11</sup>に苦しんでいたからである。直接の原因は弟ジョージの自殺(1843)や、彼女自身コレラにかかったこと(1845)などであるが、ヘンドリックは、そこにストウ夫人が若いころから医者に渡された薬、カロメル、すなわち塩化第一水銀の影響も見てとっている。すなわち水俣病で問題となった水銀汚染である。この水銀を肉体から除去するという意味では、水を多量に飲む治療は効果をもたらしたかもしれないという。

しかしストウ夫人をそのように心身ともに疲弊させた原因は、実は彼女の結婚生活に蓄積されたものであったということが出来る。著名な会衆派の牧師ラ

イマン・ビーチャーの娘ハリエットとその父親の神学校の教授であったカルヴァン・ストウは、1836年に結婚した。知的な両者の結婚は、“a companionate marriage”<sup>12</sup>として、二人そろって暖炉のそばで本を読み、宗教や哲学や文学について談じながら静かに夜を過ごすはずであった。しかしそれも子供が生まれるまでのことである。ストウ夫人は1846年水治療にでかける前の10年の内に、7回の妊娠、5回の出産を繰り返している。ヴァーモントに在る間に夫から送られた手紙は、妻の病気のために性生活が抑制されていることを繰り返しかこち、彼女の肉体が早く回復して「わたしを君のベッドと食卓に迎えてくれることがもっとも確かで安全で唯一間違いのないわたしの治療となるはずだ」<sup>13</sup>と述べている。ストウ夫人は1847年4月に帰宅し、その9カ月後再び妊娠、6番目の子チャールズを出産、その後まもなくその子をコレラで亡くすという悲しい経験をした後ですら、すぐにまた妊娠する。このように無計画に何度も何度も繰り返される妊娠、出産は、決してストウ夫婦に特異な事態ではなく、19世紀にはよくあったことではあるが、確実に女性の肉体を蝕み、衰えさせていた主たる原因であったとすることができる。

このような肉体的疲労にさらに精神的ストレスが加わる。子供が何人も生まれれば、ただですら日常生活はその養育に追われることは容易に想像がつくが、ストウ夫人の場合は文章を書く時間も捻出しなければならなかった。彼女にとって執筆は、内的な要請のみならず、子供のめんどうを見る女中を雇ったり、大家族を支えるには収入の少ない夫の経済的負担を援助するなど実際的な必要度も高く、続けて行かなければならなかったのである。このような混乱にあって常に彼女を追い詰めるものは、彼女自身に、また夫に、根強く内在していたドメスティック・イデオロギーであった。夫の場合は典型的なニュー・イングランド女性であった母親の影響があったようで、新婚の蜜月も過ぎると、しばしば妻の家事におけるだらしなさを非難するようになる。それは整理整頓のみならず、家計のきりもりのだらしなさにまで向けられたようである。

しかし家庭における女性の仕事は、整理整頓、家計、子供の養育といった日

常的な雑事のみならず、家族の精神的支えや精神的指導も含まれていたのである。

“[It] drinks up all my strength to care for & provide for all this family,” Harriet complained to Calvin, “to try to cure the faults of all — harmonise all — alas it is too much for me & an aching head & heart often show it.”<sup>14</sup>

彼女を責めるのは、夫だけではなく彼女自身に内在化された規範であったかもしれない。父親から聞かされる亡き母、ロクサナ・ビーチャーは、当時の規範からすれば「家庭の天使」として完璧な女性、完璧な母親だったという。しかしこのストウ夫人の言葉から明らかなように、娘の彼女は女性に対するそうした社会的要請に押しつぶされそうになっていたといっても過言ではない。度重なる妊娠、出産による肉体的衰えに、夫のみならず彼女自身にも強く内在する女性に対する規範を満たすことができない焦燥感、ストレスなどが相乗作用を加え、先に述べたように、ストウ夫人は心身ともに疲れ果て、ヴァーモントでの水治療となったのである。

こうして見てくると、ストウ夫人が19世紀アメリカのドメスティック・イデオロギーの体现者、信奉者であるというような言い方は、どうしても無理があるのではないだろうか。1章で言及したアモンズ自身、「ストウ夫人の母親としての人生はその経験を理想化させるものではなかった」と認めている。にもかかわらずアモンズは「しかし彼女は理想化した」と断定してしまう<sup>15</sup>。むしろストウ夫人はそのイデオロギーの正しさを信じていたが故に、その犠牲者だと言った方が正しいかもしれない。その規範を満足させられない自分を絶えず責め、また夫からも責められ、彼女の人生はストレスに満ちたものであったとすることができる。それは毎年のように母であることを強いられ、同時に完璧な妻であることを求められ、その一方で著作するための自分の部屋、自分

の時間を求めたいという、さまざまに引き裂かれ深刻な心理的圧迫に苦しんでいた女性の姿であった。

最初に述べたように、このようなストウ夫人像は、フェミニスト批評家たちによって提示されたストウ夫人像とあまりに違っているのではないだろうか。簡単に言えば、一方は、母であること、妻であることに一生懸命になればなるほどそのストレスに心身ともに疲れた女性、一方は、黒人解放という大義実現のために母親の役割と力強さを表現しその必要性を強く訴えたとされる女性。このような二つの女性像のギャップ、それはわれわれにもう一度作品を読み返してみることを促さざるをえない。そのギャップは何らかの痕跡を作品に残しているのではないだろうか。次章では、この作品の主要テーマである黒人奴隷の問題を、そこに登場する女性たちとの関わりから再考してみようと思う。

### (3)

作品はケンタッキーの農園主セルビーと奴隷商人ハリーとのやりとりから始まる。セルビーは負債を返すために、所有する黒人奴隷のなかでも一番値打ちの高いトムを売ろうとしている。“Why, the fact is, Haley, Tom is an uncommon fellow; he is certainly worth that sum anywhere, — steady, honest, capable, manages my whole farm like a clock.”<sup>16)</sup>しかしハリーは、トム一人では満足せず、たまたまそこに入って来た少年ジムと、さらに少年を探しに来た母親エライザをも加えるように迫る。しかし妻はエライザを手放すことには同意しないだろうと考えたセルビーは、トムとジムだけを手放すことにする。この農園主と奴隷商人のやりとりに繰り返される“article”という言葉が示すように、奴隷は「主人の所有する物品」であり、主人の借金のかたに売り飛ばされる、すなわち金銭と交換可能な物品なのである。セルビーが数え上げたまじめ、正直、有能、実務能力までであるといったトムの美点は、血の通う人間の人格的美点というよりは、彼の“値打ち”、すなわち高い金銭的価値

を示すものにほかならない。また主人に言われるままに歌を歌って見せたり、物まねをする少年の無邪気な陽気さも、白人を楽しませる文字通り“ジム・クロウ”の愉快さとして値踏みされてしまう。“fling in that chap, and I'll settle the business”<sup>17)</sup>そして母親エライザは、一目で“a fine female article”と判断され、“Capital, sir, — first chop!”<sup>18)</sup>という高い評価がつく。作品の中で繰り返し言及されていくように、奴隷の黒人女性のなかでも、ミュラートはとりわけ高い付加価値をもつ。理由はその美しさゆえに白人農園主の性的搾取の対象となることが初めから予想されていたからである。

以上のように、作者は作品の初めから奴隷制の否定しようのない事実を突きつける。すなわち奴隷制は経済システムであること、奴隷は売買価値をもった主人の財産であること。従って主人自身の経済が破綻すると、その破綻を救うためには売られるのが当然とされる財産の一つなのである。奴隷自身の意志は一切考慮されない。奴隷制の悲惨さの根源はそこにある。このように奴隷の身分を動産として規定し奴隷制を支えていたのが、いわゆる「奴隷法典」(Slave Code)<sup>19)</sup>と呼ばれるもので、作品の31章で原文のまま引用されている。ストウ夫人がこの作品を書く契機となったのが、1850年の「逃亡奴隷法」(the Fugitive Slave Act)であることはよく知られているが、作品そのもので一貫して批判されるのは、奴隷の身分を動産として規定するこの「奴隷法典」であった。

So long as the law considers all these human beings, with beating hearts and living affections, only as so many *things* belonging to a master, — so long as the failure, or misfortune, or imprudence, or death of the kindest owner, may cause them any day to exchange a life of kind protection and indulgence for one of hopeless misery and toil, — so long it is impossible to make anything beautiful or desirable in the best regulated administration of slavery.<sup>20)</sup>

作品中男女さまざまな奴隷が自分の過去の体験を物語るが、そのすべてがこの奴隷法典の規定に起因する不幸な体験を共有しているのである。

さて奴隷商人と売買の契約を交わし、商人が奴隷たちを連れて行く朝はさっさと姿を隠してしまう夫セルビーはさておき、われわれの関心はセルビー夫人にある。次の文章に見るように、彼女はまさしくドメスティック・イデオロギーを体現、実行している理想的アメリカ女性と言ってよい。

“I have tried — tried most faithfully, as a Christian woman should — to do my duty to these poor, simple, dependent creatures. I have cared for them, instructed them, watched over them, and know all their little cares and joys, for years; and how can I ever hold up my head again among them, if, for the sake of a little paltry gain, we sell such a faithful, excellent, confiding creature as poor Tom, and tear from him in a moment all we have taught him to love and value? I have taught them the duties of the family, of parent and child, and husband and wife; and how can I bear to have this open acknowledgment that we care for no tie, no duty, no relation, however sacred, compared with money?”<sup>21</sup>

黒人奴隷たちも自分の子供と同じように世話し、立派なキリスト教徒として育て上げることを一家の主婦の努めとしてきたセルビー夫人は、夫の話を聞いて衝撃を受ける。ここで奴隷制がドメスティック・イデオロギーと対置されている点にわれわれは注目しなければならない。夫人が認めざるをえないとおり、家族を引き裂いてばらばらに売りさばく奴隷制を認めること、それはドメスティック・イデオロギーの基盤である家族間の絆、すなわち妻と夫、親と子供、兄弟姉妹の関係を断ってしまうことを容認することにほかならないからである。今やセルビー夫人は、黒人奴隷をも家族と同様に扱ってきた彼女の家庭が、実



は欺瞞、幻想であったという事実を突きつけられたのである。つまり彼女の家庭は全く相反するイデオロギー——ドメスティック・イデオロギーと、経済システムとしての奴隷制——のうえに極めて危うい形でのっていたことが暴露されたのである。前者は家族のつながりのうえに成り立ち、後者はそれを踏みこむ。このように見ると、作品の冒頭を占めるセルビーの農園、およびセルビー夫人の家庭は、広くアメリカ社会そのものの象徴と言っているのではないだろうか。ストウ夫人が奴隷制批判に向けて立ち上がった根底には、奴隷制に対するこのような認識、すなわち19世紀アメリカ社会の基盤を支えるドメスティック・イデオロギーを覆すものとしての奴隷制、言い換えるなら、奴隷制を支持し奴隷家族を離散させて何ら疑問も良心の痛みも感じることもない白人たちが、その一方で家族の絆を重要視するドメスティック・イデオロギーの正しさを信じて疑わない、その矛盾に対する批判があったのではないだろうか。

さて自分が育て上げてきた奴隷たちが、夫のビジネスの失敗により奴隷商人に売られることになったのであるが、セルビー夫人には何ができるだろうか。彼女は「このようなひどい悪から何かいいことができると考えていた自分が愚かだった」<sup>22</sup>と嘆くしかない。そのあげく「自分の金時計をあわてて上の空で触りながら」<sup>23</sup>夫にさしだし、それで黒人奴隷を売らずにすみはしないかと考える。ここで痛烈に批判されているのは、彼女のナイーブな現実認識、底の浅い経済観念であろう。彼女は経済システムとしての奴隷制を前にして、全く無力なのである。彼女が「自分はこの残酷なビジネスの共犯者にはなりたくない」<sup>24</sup>と言おうとも、彼女の一家がすべてを失わないためにトムとジムが売られるのであるから、彼女は事実上「共犯者」であることは否定できない。

次いで白人の家庭として取り上げられるのは、奇跡的逃亡をはたしたエライザが逃げ込む上院議員ハートの家である。やはりその冒頭には、ドメスティック・イデオロギーの典型とみえる家庭の描写がある。磨き上げられた調度、暖かい暖炉、いたづらをする子供達をしつけながら食卓をしつらえる「喜びそのものとみえる」<sup>25</sup>妻が、政治家の夫を迎える。この9章のプロットは、逃亡奴

隷法の成立に賛成票を投じてきたばかりの夫を妻が批判していると、ちょうどそこに必死の思いで逃げてきた黒人母子が助けを求めて入ってきて、結局は夫が母子の逃亡を助けることになるというものである。この結末は妻の側では勝利であり、夫の側では敗北を意味するのであろうか。言い換えるなら、国会の議決に疑問を抱く妻の批判によって、夫の政治家が信念を翻しそのような行動を取ることもありうると、作者は楽観視していたのであろうか。確かに「夫と子供達がすべて」である夫人が、「家」ではなく「国家」(The house of the state) のことなどに口出しをすることなど極めて異例である。しかし彼女のそうした異例な努力も、エライザが現れ悲惨な話を実際に聞かせるまではそれほど功を奏しているとは言えない。夫の心を動かしたのは、妻の批判というよりはむしろ、死に奪われるのであれ、奴隷商人に奪われるのであれ、子供を失うという両者に共通した体験だったのではないだろうか。夫婦はつい最近子供を失うという痛ましい経験をしていたことが明らかにされる。冒頭にあった「喜びそのものにみえる」妻と平和な家庭は、実はみせかけにすぎなかったのである。ここでも奴隷制の問題が、「家」の基盤である家族の絆という観点から捉えられていることがわかる。子供を守ったエライザがこの夫婦、とくに夫に突きつけたのは、逃亡奴隷を捕まえて主人の元に返す、つまり奴隷制を支持する立場は、奴隷制の下では日常化している家族の離散、崩壊を容認することにはほかならないという事実だったのである。夫が国会で表明した逃亡奴隷法、つまり奴隷制支持の立場と、夫が帰るべき妻と子供がいる平和な「家」の存続、この二つは当時のアメリカ社会を支えるものであるが、実は両立しえない全く相矛盾する立場にあるものだという事実を、作者はわれわれに繰り返し指摘する。まず一見平和にみえる白人家庭を描き、次いでその家庭が拠って立つ基盤とそのもろさを認識させて、奴隷制を存続させているアメリカ社会の矛盾を突こうとするのである。

以上見てきたように、作者の立場は、決して家の中に安住した主婦、妻、母親、がキリスト教的愛を説くことで、奴隷制廃止をもくろむといった類いのもの

のではない。むしろ彼女たちが安住している家の欺瞞性、不確かさが、奴隷制の実態と併置されるときに暴かれていくのである。次いでドメスティック・イデオロギーを強く内在化させている女性として、北部女性オフィーリアを取り上げておかなければならない。彼女はいとこのセント・クレアがヴァーモントから南部ニュー・オリンズへと連れてきたのである。クレアの妻は主婦役を放棄したような女性であり、オフィーリアにはその代理の主婦役を果たすことが求められる。彼女にとって何よりも大事なものは、母親から受け継いできた「順序、方法、正確さ、きちょうめんさ」<sup>26</sup>であり、最大の罪は「無策無能」である。しかしこのニュー・オリンズの家では、そのことごとくが踏みにじられてしまう。さらにクレアは彼女に黒人奴隷トプシという女の子を与えて教育させようとする。つまりオフィーリアは、南部の地でドメスティック・イデオロギーに基づく教育がどこまで可能であるか、その実験を迫られたと言ってもよい。言い換えるなら、家庭での母親の役割が、肌の色の違う子供に対しても同様に機能しうるかを試されることになったと言ってもよいだろう。「トプシはミス・オフィーリアの娘と呼ばれ、またそう見なされるようになった」<sup>27</sup>。すなわち、単なる主従の関係ではなく、「母親をもったことがない」子供の母親となりうるか、という実験である。しかしこの「実験」においても、整然となされるべき家事が不可能であったように、オフィーリアが考えつく試みはすべて失敗に終わってしまう。語り手自身も認めるように彼女の教育方法はいささか古いものではあったが、問題はその手法の古さではない。失敗の決定的要因を、オフィーリアはクレアの娘エヴァによって教えられることになる。何のためらいもなくトプシに触れて彼女を愛することのできるエヴァと違って、オフィーリアはトプシの教育にあたって決して肌の色の違いを克服できなかったのである。娘の肌に触れる時のどうしようもない嫌悪感を、いわば代理母であるオフィーリアは告白せざるをえない。（“I’ve always had a prejudice against negroes, ... and it’s a fact, I never could bear to have that child touch me, ...”<sup>28</sup>）子供にキリスト教的愛を教える義務をもつとされる母親、その母

親が肌の色の違う子供を愛せないとき、その「家庭」、「母性」の欺瞞は一層浮き彫りにされることになる。

(4)

これまでわれわれは作品に繰り返される白人の母親像とその問題点を見てきたのであるが、作品には同様に繰り返される別の母親像があることを忘れてはならない。冒頭で取り上げたフェミニスト批評家はそうした母親像を取り上げてはいないのである。再びエライザに戻ることになるが、興味深いのはジムをつれて逃げようという時にエライザがみせる逡巡である。

“...you ought to have heard her talk! If she an't a Christian and an angel, there never was one. I'm a wicked girl to leave her so; but, then, I can't help it. She said, herself, one soul was worth more than the world; and this boy has a soul, and if I let him be carried off, who knows what'll become of it? It must be right: but, if it an't right, the Lord forgive me, for I can't help doing it!”<sup>29</sup>

ここでエライザを逡巡させているのは、女主人、つまりセルビー夫人とともに残るか、息子をつれて逃げるかの選択である。言い換えれば、彼女は二つの母親の間で揺れているのである。その一つは「家の中の天使」として、彼女を養育してきた“母親”であるセルビー夫人であり、もう一つは母である自分自身である。つまり“母親”を捨てて“家”から逃亡しなければ、彼女自身が“母親”であることができないということである。ここでセルビー夫人の母親像に対峙されている、エライザの母親像とはどういうものであるのか。その答えを次のトムの言葉が明白にしている。“‘tan't in *natur* for her to stay...”<sup>30</sup> トム自身は、主人への忠誠心と他の黒人たちが売られることを防ぐために逃亡はせ

ず、自己犠牲、すなわち自分が売られることを受け入れる。エライザの決断は、そのような他者への配慮を一切捨ててわが子を守るという母性そのものの決断、「私にはそうするしかない」、自己犠牲を教えるキリスト教精神にも逆らう“natur”なのである。二人の女性の間で対峙されているのは、社会的に認知され、またその社会を根底で支える伝統的母親像「家の中の天使」と、それを捨てて、あるいは踏みじって実現されるしかない母親像、である。

作品の中には、白人の母親たちとは別に、氷の張った川を駆けて逃亡したエライザを筆頭に、“natur”に突き動かされる母親像が繰り返し繰り返し姿を現す。目を離れたほんの一瞬に子供を売り飛ばされて絶望し、川に投身自殺をはかったルーシー、思いやりのない女主人に仕えたためにわが子をミルクを求めてただ泣くままに放置し死なせてしまった過去をもつプリュー。彼女はその後耳について離れないその泣き声を封じるために酒浸りになり、最後は鞭打たれて死んでしまう。子供を無理やり売り飛ばされた結果、新たに生まれた息子をその二週目に自らアヘンチンキを与えて死に至らしめるキャッシーなど。ギリギリに追い詰められた結果、思いがけないほどに勇氣ある行為を成し遂げることもあるが、一方で果てしない絶望に陥ったり、また残酷にもなる母親たち。「家」、言い換えればアメリカ社会に庇護された形で、経済にも政治にも奴隷制にもなんの関心を払う事なく、子供の養育に専念すればよい母親の陰に、つまり彼女たちの全く気づいていないところに、何も庇ってくれるものがない状況で、常にギリギリの選択をするしかすべのない母親たちがいる。この作品の中で、実は作者はこのような二種類の母親像をその視野の中に収めているのである。とりわけ後者からは運命に翻弄されるしかないあまりに無力な母親達の姿が浮かぶ。確かにエライザのように勇氣ある行動になって現れることがあるものの、それすら母子もろとも川におぼれてしまう危険性を伴ったあまりに無謀な行動であった。それはややもすると自殺、殺人といった破壊的衝動に追い詰められる母親達の姿である。ストウ夫人は一方で平和な家庭で子供を養育する白人の母親たちの欺瞞を指摘し、その一方で子殺しを犯さざるをえない黒人

の母親たちの存在を指摘する。このような複眼的視点を彼女に与えることを可能にしたのは、われわれが2章で見たような、ストウ夫人自身の母親、主婦としての個人的相克、白人家庭で当然視されていた完璧なる主婦像、母親像との相克だったのではないだろうか。理想的母親像、理想的主婦像を満たしえない煩悶から、逆に白人の価値基準からは距離をおいてアメリカの矛盾を問い直すことのできる眼が可能となったのではないだろうか。

最後に以上の観点から作品の主人公であるトムにも触れておかなければならない。最初に触れたように、ボードウィンやライトの批判を受けて、「アンクル・トム」という名前は、白人に言いなりの自尊心を欠いた臆病者の代名詞になってしまった。トムは確かにどのようにむごい仕打ちにも決して抵抗することはないし、また主人レグリーを斧で殺害し、集団逃亡を図ろうとするキャッシーの提案にも応じない。このようなトムは一見ボードウィンが批判したように「人間性を奪われ、男らしさを失った」人物のようにみえる。しかしわれわれがたどってきた女性との関係で見直すなら、トムの取る姿勢は臆病なものでもなく、また自己満足的なものでもないことが明らかとなる。トムはどれほど苛酷な状況に追い詰められようとも、ぎりぎりの戦いに挑み続け、人間性を喪失した野獣にだけは落ちまいとする。仲間の奴隷を鞭打てというレグリーの命令も、またひざまづいて許しを求めろという命令も断固として拒否する、即ち、たとえ肉体を売られても、けっして魂までは売るまいと固く決心しているのである。その意味では彼が抵抗しているのは「奴隷法典」そのものといってよい。エリック・J. サンドキストはこれを「非暴力の抵抗」(aggressive non-violence)<sup>31</sup>と呼んでいる。その「非暴力の抵抗」を貫く姿と、仲間の奴隷を思いやる自己犠牲の態度が徐々に周囲の奴隷たちに微妙な影響を見せ始めるのである。

その影響をとりわけ受けるのがキャッシーである。彼女の人生はまさしく黒人を動産と規定する法に弄ばれた人生であった。法的夫婦関係にはないものの、夫と考えていた男に自分も子供も売られてしまった過去をもつ。そのあげく先

に触れたように子殺しまでも犯す。さらに女性であるがゆえに性的搾取の被害者にもなるという、二重にも三重にも苛酷な運命を経てきた女性であった。今や彼女はレグリーを殺すことも、逃亡も自殺もできず、悲しみ、怒り、絶望のすべてを抑圧して、やっと酒の助けを借りて生きながらえているという状態にあったのである。そのような彼女を救ったのがトムである。トムは始めにエライザの逃亡の意図を知らされたときにも、“natur”として受け入れた。が同時に彼は追い詰められた黒人の母親たちが陥る破壊性や、そのあげくの悲嘆を理解していたのである。実際に手を貸したわけではないが、キャッシーにエメリンをつれて逃げる勇気を与えた、すなわち彼女をもう一度母親として蘇生させたこと、それが「非暴力の抵抗」を続けるトムの果たした役割であった。作品の終わりでいくつもの母子、姉弟、などの再会が実現するのは、確かにあまりに安易なハッピー・エンディングとの批判は免れえないが、このように見ると、それはストウ夫人の導く当然の帰結だったということができるともかもしれない。

実際ストウ夫人は家庭での母親の役割を決して否定しているわけではなく、むしろキリスト教的精神を教え実践するものとしてとりわけ重要視しているとすら言うてよい。しかしアモンズらの言うように、それをひたすら「理想化」しているのではない。ストウ夫人はその母親イデオロギー、すなわちドメスティック・イデオロギーを理想として受けいれているアメリカ白人家庭の欺瞞を指摘する現実的なまなざしを決して忘れてはいないのである。興味深いのは、作品では理想的母親像が“死者”として引き合いにだされていることである。死に近づくクレアが繰り返し思い出すのが、既に亡くなった母親であり、また残酷無比な農園主レグリーを脅かすのは、やはり死んだ母親の思い出である。またアモンズやトムキングズが指摘したとおり、クエーカーのコミュニティの母、レイチェルも理想的な母親とされている。しかし誰もすぐ気づくように、クエーカーはアメリカ社会においては疎外された存在であったはずである。ストウ夫人の生きる 19 世紀アメリカ社会において、ドメスティック・イデオロギ

ーは確かに理想として母親達の精神や行動を規定するものではあったが、いかにそれが本来の精神を失い、欺瞞的なものとなっているか、その指摘は、奴隷制を批判したキリスト教的美德を主張する作品においても、十分になされているのである。アメリカ社会が奴隷制を存続させている限り、アメリカの母親達はいかに理想を口にしようと、それは浅薄でうつろな響きしかもたないのである。

### 注

1. Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin or, Life Among the Lowly* ed. Ann Douglas (Penguin Books, 1981).  
『アンクル・トムの小屋』からの引用はすべてこの版による。
2. James Baldwin, "Everybody's Protest Novel," in *Notes of a Native Son* (Penguin Books, 1995), p. 22.
3. *Ibid.*, p. 23.
4. Elizabeth Ammons, "Stowe's Dream of the Mother-Savior: *Uncle Tom's Cabin* and American Women Writers Before the 1920s," in *New Essays on Uncle Tom's Cabin* ed. Eric J. Sundquist (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), p. 158.
5. *Ibid.*, p. 160.
6. *Loc. cit.*
7. Jane P. Tompkins, *Sensational Designs* (New York: Oxford University Press, 1985), p. 143. アモンズは "maternal ideology"、トムキンズは "domestic ideology" という用語を用いているが、本論ではトムキンズにならって、「ドメスティック・イデオロギー」を用いることにする。
8. Elizabeth Ammons, p. 162.
9. *Ibid.*, p. 167.
10. Joan D. Hedrick, *Harriet Beecher Stowe A Life* (New York : Oxford University Press, 1994).
11. *Ibid.*, pp. 174-6.
12. *Ibid.*, p. 122.
13. *Ibid.*, p. 178. ゴチック体の箇所は原文ではイタリック。ここでは夫婦関係をさすことは明らかである。



14. *Ibid.*, p. 146.
15. Elizabeth Ammons, p. 158.
16. *Uncle Tom's Cabin*, p. 42.
17. *Ibid.*, p. 44.
18. *Ibid.*, p. 45.
19. この奴隷法典は、必ずしもすべてが明文化されておらず、その一部は次の二冊からうかがい知ることができる。  
*Extracts from the American slave code* (Philadelphia Female Anti-Slavery Society, 1829?)  
William Goodell, *The American Slave Code* (New York: Negro Universities Press, 1968), originally published in 1853 by the American & Foreign Anti-Slavery Society.
20. *Uncle Tom's Cabin*, p. 51.
21. *Ibid.*, p. 83.
22. *Ibid.*, p. 84.
23. *Ibid.*, p. 85.
24. *Ibid.*, p. 86.
25. *Ibid.*, p. 101.
26. *Ibid.*, p. 247.
27. *Ibid.*, p. 357.
28. *Ibid.*, p. 410.
29. *Ibid.*, p. 90.
30. *Loc. cit.*
31. Eric J. Sundquist, "Introduction" to *New Essays on Uncle Tom's Cabin* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), p. 33.